The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第10回臨床哲学フォーラム「哲学に「臨床」は必要か？」の特集にあたって
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 83-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94562
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第 10 回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「哲学に「臨床」は必要か？」

第 10 回臨床哲学フォーラム
「哲学に「臨床」は必要か？」の特集にあたって

小西　真理子

日時：2023 年 6 月 28 日（水）17:00～19:00
場所：大阪大学豊中キャンパス CO デザインスタジオ（全学教育総合棟 3 階）
開催方法：対面

【企画概要】

A：臨床哲学のひとつのあり方は、社会の中で出会った人びとが対話をしながら、共に哲学をする姿に見いだされます。
B：えっ？　そもそも哲学ってそういうものじゃない？　わざわざ「臨床」なんてつける必要あるの？
C：いや、そんなものは「哲学」ではない。
A：臨床哲学では、哲学者が社会の「現場」に直接赴き、その場所に身を置くことを重視します。
B：そんなの生きていれば普通にすることじゃないの？　わざわざそんなことをアピールする必要があるの？
C：哲学者は文献研究こそ取り組むべき。哲学者が「現場」に行ったところで、邪魔でしかないのでは？
　臨床哲学の名称問題や哲学者が社会の「臨床」に赴くことなど、臨床哲学に投げかけられる問いのあれこれについて応用倫理学者の奥田太郎さんといっしょに考えてみませんか？

【プログラム】

17:00-17:05　趣旨説明、登壇者紹介　小西真理子
17:05-17:35　【講演】哲学に「臨床」は必要か？　奥田太郎（南山大学）
17:35-17:45　質問者①片岡花菜（大阪大学院生）
17:45-17:55　質問者②六郷颯志（大阪大学院生）
17:55-18:05　院生コメントへの応答
18:05-18:20　休憩
18:20-18:40　【対談】哲学に「臨床」は必要か？　奥田太郎×堀江剛×ほんまなほ
18:40-19:00　会場からの質問

2023 年 6 月 28 日（水）に第 10 回臨床哲学フォーラム「哲学に「臨床」は必要か？」を開催し、講師として南山大学の奥田太郎さんにご登壇いただきました。企画概要にもありますように、「臨床哲学」という看板が立ち上がってから、臨床哲学という名称問題や、哲学者と臨床の関係について、さまざまに意見が取り交わされてきました。そのようなやり取りを改めて明示化させることが本フォーラムの趣旨となります。

まず、臨床哲学の名称問題についてです。臨床哲学の立ち上がりの背景には、哲学者の書いた文献に対する研究、哲学史研究からなる国内の学問としての哲学に対する違和感があり、臨床哲学においては、教室のなかで本を読むだけではなく、教室から外に出て社会のなかで哲学するという実践が志向されています。そのような実践そのものに対する疑義が呈されてきたことは言うまでもありません。他方、そのような実践こそが哲学と考える人々は、「臨床哲学」こそが「哲学」であるため、わざわざ「臨床」を冠する必要はない、堂々と（臨床哲学の看板のもとに営まれてきた実践をもって）「哲学」を名乗るべきだという主張もあります。そもそも「臨床哲学」が目指しているものは何でしょうか。「臨床」も「臨床哲学」もその活動の数だけ存在するという立場をとったとき、その営みに無限の広がりがあることは当然のこととして、あるひとつの場所で語られていた「臨床」ないし「臨床哲学」の意味も時間の経過や人の入れ替わりにおいて変化することを考えたとき、現在の臨床哲学に既存の視点にはなかったものが形成されていることも考えられます。

続いて、哲学者が臨床に赴くことについてです。哲学者が臨床、いわゆる現場に赴くことには賛否があります。机上の空論ではなく、現場に赴くからこそわかること、その場所で生きる人たちと共にあることでこそ導かれること、現場の声をくみ上げることなど、臨床の知に依拠する哲学の意味というものは確かに存在すると思います。しかし、他方で現場のことを何も知らない哲学者が現場に参入することで、何らかの問題、搾取、加害が生じることもありますし、そこまでいかなくてもただ単に足手まといになるということは十分に生じることでしょう。臨床現場の手を煩わせることなく、研究者として分相応の研究スタイルを維持することも倫理的なあり方です。また、わざわざ臨床に赴くことを強調することにも疑問が生じるでしょう。私たちは生きるなかで、さまざまな臨床をそれぞれに有していて、それは多かれ少なかれ執筆物に反映されます。わざわざ特定の現場を名指し、それを執筆物のエビデンスとすることがあるとするならば、そこには何らかの思惑が混ざらざるを得ないのではないでしょうか。また、文献研究を行っている人のなかには、ある問題・事象の当事者であると表明していないとしても、「隠れ当事者」「隠れ当事者的当事（奥田さんの原稿をご参照ください）」である人もいらっしゃるはずです。だとすると余計に「臨床」とは何か、「臨床」を強調することの意味は何か問い返されることになるでしょう。そして、哲学者はどのように臨床と関わる／距離をとるべきなのでしょうか。

このように「臨床哲学」にはさまざまな問いが投げかけられてきたし、投げかけられ得るわけです。このような問いについて、臨床哲学が立ち上がった当初より、応用倫理学者として臨床哲学を外から見てきた・臨床哲学と接してきた・臨床哲学を支持してくださってきた

奥田太郎さんに本フォーラムではお話しいただきました。奥田さんはご自身が臨床哲学のことをどのような立ち位置からどのように見てきたか、ご自身のポジショナリティを明確にされつつ、あくまで「応用倫理者」の立場から論じてくださいました。応用倫理学／応用哲学に「応用」を冠することと、臨床哲学に「応用」を冠することを対比させながら、応用倫理学者としての、ある問題に対する倫理的な関わり方についてご講演いただいたように思います。奥田さんのご講演に続き、臨床哲学研究室の院生、片岡花菜さん、六郷颯志さんに指定質問をいただき、その後、研究室教員の堀江剛さん、ほんまなほさんを交えて、奥田さんとの対談が行われました。特定質問と対談についても、ぜひ特集内容をご覧いただければと思います。

フォーラム後にいただいた奥田さんの言葉を借りれば、現在、大阪大学の臨床哲学研究室は「第四世代」（第一世代：創設メンバー、第二世代：臨床哲学を形作ってきたメンバー、第三世代：臨床哲学に参入したメンバー、第四世代：臨床哲学の歴史を引き受けつつ、再度臨床哲学を創造するメンバー）に突入したのかもしれません。今後、どのような臨床哲学（or 哲学）が立ち上がってくるのか、楽しみでなりません。

（こにし・まりこ）